東方花梨（５歳）のクリスマス

蜜柑ブタ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仗助の姉ネタからの派生、続編？

東方ミナミの娘、東方花梨（ひがしかた　かりん）の５歳の時の出来事を短編にしようとしたら、長くなりそうだったので少しだけ連載してみた。

簡易キャラ設定

・東方花梨

東方仗助の双子の姉・東方ミナミと、ナランチャ・ギルガの間に生まれた娘。

イギリス系アメリカ人と日本人ハーフの母と、イタリア人の混血。
顔立ちはミナミ似だが、鼻筋はナランチャ似。
生まれつき超強い霊能力を持ち、スタンド能力もある。

簡易クリスマスイベントあらすじ
強すぎる霊能力と謎が多いスタンド能力を生まれつき発揮していた花梨の将来を心配され、スタンド能力の制御の教育のため急遽スタンド能力者を多く抱えているギャング組織パッショーネで父ナランチャを中心に取り組むこととなる。
クリスマスの日が近い時に母ミナミと共にナランチャの待つネアポリスへ来た花梨だが、少し目を離した隙に常習化していた神隠しが起こってしまい、消えた先でちょっと胡散臭い老紳士な男に出会うが……？

ホームアローンのようなドタバタ劇を目指したい。若干の親達のシリアスもあり。

あとパッショーネからの捜索隊としてオリジナル幹部やその部下としてスタンド使いが出ます。

目次

第1話　迷子（神隠し）から始まる冒険？ ―――― 1
第2話　見えづらい見つけにくいストーカー解き放たれる ―――― 12

第1話　迷子（神隠し）から始まる冒険？

「あ～～～、やっと着いた……。」

大きなキャリーバックを引きずりながら、もう片手で幼い少女と手を繋いだ東方ミナミは、冬の寒空の下で目的地に辿り着けたことに思わず疲れたように声を漏らした。

イタリアのネアポリス。ここが目的地であった。飛行機での長い旅を経て空港から更に交通機関を使って移動した。幼い子供を連れた状態で旅荷物を運ぶのは大変だ。聞き分けの良い我が儘言わない大人しい子供とはいえ、長旅は堪える。むしろ泣き言ひとついわない我が子が心配であるし、それ以外の心労や疲れが日々溜まっていて母親の方も顔には出さないようにしていたが辛い状態だった。

大人しい我が子の名前は、花梨。

今年5歳になった実の娘である。

ナランチャ・ギルガと結婚して、今年になって33歳になったミナミも別居国際結婚という特殊な夫婦関係とはいえもう立派に母親である。

しかしそんなミナミも、夫のナランチャも悩ませている問題が起こっていて今回の

イタリア訪問となったのだ。

簡単にハッキリとミナミとナランチャの夫婦の悩みの原因を言ってしまえば、原因は2人の娘の花梨にあった。

生まれた時から神隠しや、突然怪我をしたり、見えない何かに反応して言葉が喋れるようになるとそれが死んだ者…、つまり幽霊だということが判明した。

幽霊を見て、声を聞いて、会話ができて、触ることも可能で、生者と死者の区別ができないほどハッキリと死者と交感ができてしまう、霊能力者としてパーフェクトと言えるレベルだと判明した。

更に追い打ちをかけるように起こった異変は、幽霊だけじゃなく、死んだ人間が所持していたスタンドを使うことができたことだった。

しょっちゅうある神隠し。その内の一件で歩いたり走ることができてもまだまだ未発達で危うい足取りしかできなかった頃に、なんとかつてのナランチャの仲間であったアバッキオのスタンド、ムーディーブルースが花梨と手を繋いで家に送り届けるという出来事があった。それ以来ムーディーブルースは花梨の保護者のようなボディーガードのような感じで何かあると傍にいることが多くなった。

本来のムーディーブルースと違い色が抜けたように白いのがすでに死亡したスタンド使いのスタンドをコピーして再現しているという表れなのか詳細は不明である。

しかしいつの間にか伯父である仗助のスタンド・クレイジーダイヤモンドをコピーしていてその力を使った際には本物の方と同じ色であった。色の違いが死んでいるかどうかの表れなのか花梨本人に聞いても当の本人はスタンドの力が無意識であるためうまく説明できず、コピーされたムーディーブルースも喋らないので何も分からない。

スタンド使いを中心に親族と知人で話し合い、花梨の成長に伴うスタンド能力の強大化を危惧し彼女の平穏のためにも早い内に対策した方が良いという結論になり、クリスマスを目前とした日にちに手配がやっと整ってイタリアへ来た。

待ち合わせの予定時間までまだ時間があったので、疲れたミナミはベンチに腰掛けた。花梨もミナミの横にちょこんと座る。本当に泣き言ひとつ言わない。

冬の寒空の下、雪が降りそうな天候で空気が冷たい。気温が低いとトイレが近くなるものでずっと黙っていた花梨がモジモジと動いたのをミナミが気がついて近くのジェラート屋にお願いしてジェラートを買う代わりにトイレを借りた。

店員もミナミの疲労が浮かんだ顔を見て心配になったのか店内に椅子を用意してくれるなど気を遣ってくれて、疲れが溜まっていたミナミはそれで気が緩んでしまった。

背もたれのある折りたたみできる椅子に座ったはいいが急激に来た眠気に意識が朦朧とした。店員の老女がその様子を心配して目を覚まさせてあげるためにコーヒー

でもと店の奥へ行った。

　ところでこの店のトイレは表からは入れず店員のいる場所を除けば裏口を通らないといけない作りになっている。なのでトイレに行った花梨はトイレから出たら裏口を通って戻ってこないといけない。ミナミが疲れ切っていたのもあるし、花梨が賢くて良い子だったという親の信頼による親の慢心もあった。

　だからミナミが花梨が戻ってこないことに気づいた時には花梨の姿がどこにもなかった。

「う…そ……。」

　そのことを理解したミナミはヘナヘナと力が抜け、震える手で携帯を取りだしてナランチャへの緊急連絡先へ電話した。

　ジェラート屋の店員達が非常事態を知ってまだ周囲にいる可能性が高いと花梨を探しに出たり、青ざめて震えているミナミを励ましたり、どこかへ電話して迷子の情報を求めたりと騒ぎになった。

＊＊＊

「やあやあ、美しく可愛らしいお嬢さん。なにかお困りごとかな?」

フワフワとファーが付いたコートの端を握りしめて俯いていた花梨の近くで男の低い声が聞こえた。

顔を上げると、白いちょびヒゲのある40代か50代ぐらいの老紳士が花梨の前にいた。

赤白の派手なスーツとシャツ、ネクタイ、ハットを頭に被り高そうなしっかりした造りの杖を手にしているが足腰は悪くなさそうである。

老いてはいるが整った顔立ちとしっかりした背格好もあり、紳士的な優しさがある笑みだが、どこか胡散臭い雰囲気が感じられて大抵の人間は一瞬引くのだが、花梨はキョトンとはしても引かなかった。赤白紳士はそれが意外だと少し驚いたような顔をしたがすぐに笑顔になり花梨の前で片膝をついて目線を合わせた。

「肝の据わったお嬢さん、何やらとても悲しそうだね? お家に帰るのは嫌なのかな?」

耳に心地良い低音で奏でられる言葉は花梨の心に刺さる。目を僅かに見開いた花梨の様子に紳士はニッコリと笑い右手を差し出した。

「一緒に家出をしよう!」

「……えっ?」

ずっと黙っていた花梨が思わず声を漏らす提案に、けれど紳士は笑顔で言う。

「パパとママを困らせたくない!? ノンノン! たまのビッグなワガママカモーンだよ! 君はとってもよい子だ! ワガママ言って欲しいのもパパとママのワガママ! ワガママ叶えちゃいなよ!! 叶えよう!! さあ、行こうお嬢さん!!」

「えー?」

老紳士の勢いに圧されて花梨は呆れたように声を漏らした。どっちが子供か分からない。

「な〜に、一生に一度ぐらいドデカいワガママ叶えたっていいじゃないかい? 大人になって年を取って大切な人に話せる話題になるのさ! きっと大切な人が笑ってくれるよ!」

「……ほんとう?」

年齢不相応の落ち着いた声色から一転して、花梨の声が弱る。ギリギリまで張り詰めていた糸が緩んだように弱った声の調子に、紳士はその状態が彼女の本当の心の状態だと感じ取り改めて笑顔を作り、完璧な姿勢で恭しく手を差し出す。

「お嬢さん。お手をどうぞ。」

花梨は、少し考える。

この手を取れば単純な迷子どころか誘拐案件で家族に迷惑がかかるのは目に見えている。そもそもこの紳士のおじさんが胡散臭い。しかもココは日本じゃなくて海外。イタリアは父・ナランチャの仕事の大事な場所で、迷惑かければナランチャに大迷惑がかかる。まだ5歳だしギャングのことも何一つ知らないが本能的に良くない仕事をしていることと、仕事に何かあればナランチャの色々もろもろが大変だというのは理解していた。色々もろもろの詳しい内容はまだ理解できないがナランチャにとって良くないことであるということだけは分かっていた。

「お嬢さん。」

迷う花梨を後押しするように紳士の優しく強い声が言う。

「冒険に出てみようじゃないか！　後ろの〝彼〟も賛成みたいだよ？」

「あっ。」

迷っていた花梨の背中を優しくポンッと押したのは、白いムーディーブルースだった。押された花梨の小さな身体がバランスを崩し、その身体を紳士が受け止める。

「エスコートはお任せあれ、お嬢さん！」

「……あの……。」

「早速なにかな？　お嬢さん？」

「……名前。」

「おっと失礼した。私は通りすがりのバッボナターレさ。」
「バッボナターレ……。」
「気軽におじ様でも良いよ?」
「おじ様。」
「はい、お嬢さん。」
「……わた…っ。」
　自分の名前を言おうとした花梨の口に紳士の手袋に覆われた指が当てられ言葉を遮られた。
「失礼。これは私のワガママだ。君の名前は聞かないでおきたい。いいかい?　これから始まる冒険は戦士が馬鹿正直に名乗り上げて正々堂々の物語じゃないのだ。正気なのは良いことだ。ずる賢い嘘つきが勝つ物語がある。頭の良い君には分かるよね?」
　空いた手で静かにと指を自分の口に当てる仕草をする紳士の言葉を聞いて花梨は頷いた。
「まったく、君は本当に真面目で良い子過ぎる!　これは楽しい冒険になるよ!」
「ココって、今どこ?」
「ここはネアポリスの中心の端っこ。まんまるの外に外れるか外れないかのギリギリラインだよ。さあ、なにかしたいことあるかい?　食べたい物や行きたいところあった

ら言ってくれ。」
「んー…。」
「では、私のオススメに行こう！」
「えー？」
「お手々冷たいよ！　まずはホットにならないとね！」
じゃあなんで聞いたの？っと聞きたかったがまだ花梨にはそこまでツッコミを入れる力は無かった。
バッボナターレと手を繋いで歩いている間、花梨ははて？とあることに気づいた。
もしかして…、この人にはオトモダチが見えていた？
花梨にとってのオトモダチとは、自身のスタンドとそれにコピーされた死者のスタンドのことだ。
バッボナターレは、後ろにいる〝彼も〟と言っていた。つまりムーディーブルースが見えていたということだ。スタンドはスタンド使いにしか見えない、その法則は周りから教えてもらったし身内に多いのでよく分かっている。
「……ま、いっか。」
あれこれ考えても仕方ない。考えるのに少し疲れた花梨はバッボナターレが悪人ではないということだけは、ムーディーブルースが保障していると思えたので、投げや

り気味にまあいいやと力を抜いたのだった。それにムーディーブルースは神隠しが起こると手を繋いで家まで送ってくれるし、家までの距離が遠すぎるときは家族に見つかりやすいよう別の行動をするし、悪いことから花梨を守ってくれる。ムーディーブルースは喋らないのでその気持ちは分からないが花梨にとって敵意あるものではないと、その行動から理解できる。ナランチャがムーディーブルースの本来の持ち主であるアバッキオという人物とは性格などが別人だと言っていた気がするがよく分からない。

そういえば野乃佳も『花梨は気にしすぎ。周りを気にしすぎてばかりじゃ疲れるだけだから、まあいいかって考えて気楽に行こうよ』って言ってた……。

花梨の友人である四ノ原野乃佳はすごくそう言ってくれていたのだ。野乃佳は彼女の両親が心配するほど好奇心が強く、強い霊能力があって神隠しなどの不可思議なことが多い花梨にすごく友好的で不思議な出来事を共有してくれる親族以外の他人であった。スタンド使いではないのだがそういった不思議や奇妙なことに恐れが無い。

野乃佳の言うとおり力を抜いてみた。知らない他人なうえに胡散臭い紳士と行動するという状況だがそのおかげでずいぶんと楽になった気がする。

この時に花梨は深く考えすぎず、力を抜くことを覚えた。

こうして花梨が気を抜いたことでネアポリスを舞台としたクリスマスのドタバタ

劇が始まるのだが、５歳にして色々と張り詰めて自覚無く疲れていた花梨は知る由もない。

第２話　見えづらい見つけにくいストーカー解き放たれる

「……そうか、分かった。引き続き情報収集を続けてくれ。」
ブチャラティは、通話を終えると受話器を置いた。
フーッと息を吐き、それから部屋のソファーに座って顔を手で覆っているミナミを慰めているナランチャを見た。
視線に気づいたナランチャがブチャラティに顔を向けた。
「ごめん、ブチャラティ…。」
「謝る必要はないぞ。」
娘の花梨のことで謝罪するナランチャにブチャラティは首を横に振った。
「あ…の…。」
「すまない。まだ情報が掴めていない。出来うることはすべてやるつもりだが……。」
不安げに顔を上げるミナミにブチャラティはそう言った。

花梨の神隠しは、場合によっては日本でも県外で発見されたということもあった。だから国外のイタリアで起こるとなれば余計に地理に疎くなるので捜索範囲を広げても発見できるかどうか怪しい。ムーディーブルースが現れてからはムーディーブルースが連れて帰ってきてくれることが多く、また神隠しの頻度も年々少なくなってきていたのもあり完全に油断していた。

スタンド能力の訓練と教育、能力を把握するためにイタリアに来てパッショーネで預かることとなった理由は、父親のナランチャがいるからだけではない。レクイエムであらゆる出来事を無効化して真実に辿り着けなくさせられるジョルノが万が一に対応できるからというのもある。ミナミと愛陽のレクイエムは別としてそれ以外に通用するだろうから。

日本人の血が入っているとはいえ、イギリス系アメリカ人の遺伝子が強いミナミの子である花梨の顔立ちはハッキリ言って日本人の顔立ちではない。ミナミと同じ色の青い目の色もブルネットの髪色もミナミの父親であるジョセフの若い頃に似ているらしくジョースター一族の遺伝子が強すぎると古い知人達がコメントするほどである。ナランチャの顔と見比べてみると鼻筋がナランチャに似ているのが分かるがそれ以外の顔パーツはミナミ似。成長するとどうなるか分からないが。西洋の地で白人の特徴が強い外見をした花梨を探すのは難しいかもしれないが、こちとらギャング、ディアボ

口時代からの情報網は握っている。
「ブチャラティさん。」
「どうした?」
　ミナミのことはナランチャに任せ、客室から出たブチャラティの所へパッショーネに所属するギャングの部下が駆け寄ってきた。
　その部下がブチャラティにあることを伝える。それを聞いたブチャラティは、すぐに携帯を取りだしどこかへ連絡した。それから足早にNo.２の執務室へ向かう。
「ブチャラティ様、お話とは?」
「ジャジント。お前に仕事を頼みたい。」
　パリッとしたスーツの５０代ぐらいの男が入室してきたのでブチャラティが手短にそう伝えた。
　ジャジントと呼ばれた男は僅かに目を見開くが、すぐにブチャラティから投げて寄越されたメモリーカードを慌て手で受け取り、我に返って深々と頭を下げ急いで部屋から出て行った。
　ジャジントが去った後、部屋に設置されている内線電話が鳴った。受話器を取ったブチャラティは、通話相手とやり取りを始めた。
「ああ…、今回のコレでジャッジ（判断）しようと思う。……分かった、好き

にさせてもらう。あの男でおそらく最後のはずだ。」

『…年越しまでに古い無駄な汚れ落としを最後にしましょう。ああ、本当にクソほどに面倒くさい落ちない汚れでしたね。』

通話相手であるパッショーネのボス、ジョルノがそう言っていた。

＊＊＊

ブチャラティから投げ渡されたメモリーカードから情報を出力したジャジントは、部屋に設置されているコピー機で数枚の紙に出力した内容をコピーした。

「スコム！　スコム！　いるなら出てこい！」

自宅に帰ってからすぐにスーツを脱いで下着の上にバスローブを身につけているという部屋着の格好のジャジントは、イライラを隠すことなく自分以外がいない部屋の中で怒鳴り散らす。

すると。

「お仕事おっすかぁ？」

低い男の声なのだがどこか抜けたような、聞く人によっては頭が悪そうだと感じそうな喋り方の男がどこからともなく現れた。

浮浪者かと思ってしまうほど小汚い格好だが、一見痩せているように見える長身の手足は硬く引き締まっており服で隠れて見えないが服の下の身体のあちこちには傷跡がある。顔は彫りが深くボサボサの短い赤毛と無精髭、目の周りが寝不足みたいに黒いクマになっており、酷い猫背とボロボロの格好も相まって何も知らない普通の目線で見れば蔑まされるだろう。

「呼んだ理由はそれしかない！　言われなくても分かれ！　このアホが！」

「コレ、仕事？」

ツバを吐き散らして怒鳴り散らすジャジントの怒声を聞きつつ、コピー機から出てきている書類を指差してスコムという男が子供みたいに無垢さを感じさせる表情をして首を傾げる。

「さっさと行け！　ノロマ!!」

「は～い。」

スコムは書類を手に取って無邪気に返事をし、部屋から出て行った。

ジャジントは、イライラとタバコに火を付け、煙を吸い込み吐いてからドカリッと大きな皮椅子座り込んだ。

「若造共が…、馬鹿にしおって…。」

そう言ってテーブルの引き出しを開ける。

そこには無数の針やカッターナイフの替えの刃が突き刺さったジョルノとブチャラティの写真が入っていた。角度から盗撮であることが分かる写真だ。

ジャジントというこの男、パッショーネに所属する幹部クラスのギャングとしてディアボロがボス時代からの古参である。

年功序列思考こそあれ悪運と部下の功績で今の地位と収入を安定させているタイプで、その思考のせいで若いながらボスの座と№2などに座ってパッショーネを掌握したジョルノ達に反感を持っていた。

しかしジョルノとブチャラティを倒せるほどの知力も人脈も無い、しかもジャジント自身はスタンド使いですらない。部下はスタンド使いだ。そのスタンド使いのおかげでジャジントがいまだにパッショーネにいられるようなものである。

そのスタンド使いというのがスコムだ。ジャジントがストリートチルドレンだった彼を拾い、教育して都合の良い部下にした人間だ。

頭が悪く、けれど与えた仕事を善悪抜きに実行して思わぬ成果を出すことさえある優秀な駒であった。重労働に見合わない低賃金や自身に浴びせられる虐待の数々にも理不尽にも疑問を持たない。その従順さと成果を出すスコムのことを話すジャジント

に他のギャングが羨ましがるほどである。しかし当のジャジントはその価値をいまいち理解していないようである。そのためベラベラと愚痴感覚でスコムのことを話してしまっている。そのためジャジントへの評価はジャジントのお抱えのスコムへの評価であった。残念ながらジャジントはそのことを知らないようであるが。

そんな状態であるからスコムに接触を試みようとする人間は多かった。ジャジントの言葉が正しければ仕事の成果に対する報酬が極端に低い状態で、更に奴隷まがいな扱いをされてこき使われていることが分かるのでそれ以上の報酬を出したり好待遇を出して自分の所へ引っこ抜こうとしたのだ。

ところがジャジントの話通りの人間が見つからなかった。情報が全くないわけではない。だが見つからない。びっくりするほど見つからない。それっぽい人間の目撃情報があるにはあるが捕まえられない。手紙などによる接触も成功しなかった。

あまりに見つからないためジャジントの言うスコムが本当に存在するのかという疑惑が出るほどであった。

ジャジントはスコムについて頭が悪いが従順で使い勝手だけは良いと言う他にこうも言っていた。

影が薄すぎて目の前にいても見失うことがある

スコムを引き抜きたいと企む者が酒の入ったジャジントからスコムの情報を聞き出

したときに愚痴混じりにそう言っていた。

目の前にいて見失うとはどういうことなのか？

普通の人間の感覚ならそんなオカルトじみた奇妙なことは信じられないだろう。

だがしかし一部の普通じゃない枠に足突っ込んでいる人間達なら信じる案件だし、分析するために頭を使う案件だった。理由は簡単、スコムのオカルトじみたその特徴がスタンド能力であるのなら説明がつくからだ。

スコムを行かせた後に、ジャジントは急いで着替えをして他の部下を連れて外へ出た。

ある大物幹部と今回の捜索任務をするためだ。

「先に行かせただ？　それならせめてもっと早く報告しろ。」

「すみません…。」

「呼び戻せないのか？」

「アレは仕事熱心で…集中すると連絡が取れないことが多いのです…。」

「あー……、ターゲットがストーカーされすぎて死ぬ、か？」

「はい…。」

「……あのな…」

合流場所で顔を合せて早々にジャキッと音が微かに聞こえ、ジャジントの額にリボ

ルバーの銃口。
　パッショーネの幹部、グイード・ミスタは冷たい眼差しで愛用のリボルバーを腰が引けている体勢のジャジントの額に押しつけて言葉を続ける。
　ジャジントは自分より若いが地位の高いにいるミスタの言葉に広い額から汗をにじませた。
「最優先保護対象を殺す気か？」
「そんなことは…！」
「とっとと呼び戻せ。」
　リボルバーの引き金にかけた指に力を込め始めるミスタ。
　その時ジャジントの携帯からメールの通知音が鳴った。
「失礼！」
　ジャジントが一言言ってから携帯を取り出して通知を確認した。
「…スコムからです。」
「……で？」
「対象を見つけて追跡しているようです。」
「もう見つけたのか？」
「捜し物が得意な奴でして…。」

「なるほど。良い部下だな？」
「はい…。」
「じゃあ、お嬢さんを迎えに行くから場所を教えろ。」
「そうしたいのは山々なのですが…。」
「あ？　なんか不都合があるのか？」
ジャジントは目を泳がせ気まずそうに汗までかく。
「どういうことだ？」
「スコムは…、その…影の薄い奴でして…。そのせいかアイツが追跡している状態だとターゲットまで見つからないことが…。」
「はあ？」

最凶のストーカーの思わぬ弊害？

あるときにスコムに追跡させた状態で通信しながらターゲットをジャジントが捕獲しようとしたのだが、なぜかターゲットが見つからないまま国境を越えられて逃亡されるというようなことがあった。結局その件はスコムに追跡を続行させて逃亡に成功したと思い込んだターゲットが気の緩みで必要な情報を吐いたので、それをスコムがジャジントに流してからジャジントの命令で用済みになったターゲットをスコムに暗殺させたという結末になった。

「どーすんだ？　ええ？」
「だ、だいたいの場所を把握してからスコムを離脱させれば！」
「だったらそうしろ。」
「はい！　今すぐに！」
ミスタに急かされジャジントは急いで花梨の居場所を把握してからスコムがストーキングをやめるよう指示を出すために行動した。
しかし。
最凶のストーカーが惑わされる要素がすぐに発覚し、花梨捜索と保護が困難になっていくのであった。

「あれ？　あれれ？」
スコムはネアポリスの外れ近くで花梨を見失い、慌てて周りを見回した。
スコムは花梨を再度見つけるために急いで行動したが、5歳の花梨の足で届く範囲で見つけることができなかった。
バッボナターレと行動している花梨を追跡していたが、デパートに入店した辺りでトイレに入った花梨を見失わないためにスタンド能力を使ってトイレの中まで追跡しトイレから出てきた花梨が手洗いをしてからバッボナターレの隙を突いてデパートか

ら脱出していくのも見ていた。花梨は後ろを気にするようにたまに立ち止まったりを繰り返し、不意にスコムの目から外れて姿をくらますこともあったが幼い子供が本能で得体の知れない不安という形でスタンド能力の気配を感じ警戒されることをスコムは経験していたからスコムは花梨が警戒して必死に追跡をかわそうとしているのだろうと考えてそれでも任務なので追跡を続けていたのだ。

しかしネアポリスの外れ近くでついに花梨の姿形が消えた。

慌てるスコムは知らないが、スコムが花梨を見失った場所は、花梨が神隠しで飛ばされてバッボナターレと出会った場所だった。

＊＊＊

「お嬢さん？　彼はいったいなにを？」

「……よく分からない。」

バッボナターレが言うお友達の彼とは、ムーディーブルースのことだ。ちょっと視線を変えたらいつの間にか出てきていて、どこか行って帰ってきたような様子だったか

らだ。

「そうか。では、次はコレを。うーーーん！　似合う！　似合うよぉ!!」

「いいですねぇいいですねぇ!!　モデルが良いとお洋服が喜びますねぇ!!」

クリスマスの時期だけしか流通していない期間限定の服や防寒着のブランドの着せ替えショーがデパートの服屋の一角で行われていた。

バッボナターレと知人であるらしい年齢不詳かつ中性的な外見の店員が腰をくねらせてキャピキャピと裏声で興奮している。長身バッキュッボンッのボディにゴテゴテの厚化粧をしているのに口周りの青ヒゲは隠さないのか？っと疑問に思えてしまうがそういうファッションなら仕方ないと花梨は顔にも声にも出さなかった。

十数着ほど色々と薦められたブランド品を試着し、レジのテーブルに山盛りの服と靴などの履き物が入った箱も重ねられ、バッボナターレの知人店員以外の女性店員がポカーンとしたりしてバッボナターレがキャッシュで支払ったため別の方向で女性店員が驚いてしまうという流れとなった。

「んん～、お嬢様、なんて字が綺麗なのかしら！」

「そう？」

宅配サービスで山盛りの服類を日本の実家に送って貰うことになったので、宅配先の住所を書類に書いていると青ヒゲ性別不明店員さんが花梨が書く字を褒めた。

花梨はべた褒めされる一方で、この山盛りの高級なお洋服をいきなり実家に送ったらお婆ちゃん達が腰を抜かすかも?っと淡々と祖母達の健康を心配していた。

「ありがとうございました〜！　またいらしてね！」

「少し休憩しようか。」

買い物を終えて店をあとにしてからバッボナターレが花梨と手を繋いで歩きながら聞いた。

花梨の格好は地味めだった冬服からバッボナターレと青ヒゲ性別不明店員さんが吟味してくれた可愛らしくも上品な冬服の格好になっていた。ついでに美容系の知識と技術もある青ヒゲ性別不明店員さんが従業員室で手早くお化粧と髪のセットまでしてくれ、花梨の見た目はすっかり良いところの育ちの良さそうなお嬢様だ。

濃いい店員さんとのやり取りで少し疲れたのは確かだ。花梨が頷くとバッボナターレがデパート内にあるカフェに行こうと誘った。

店の前から甘いコーヒーの香りがして花梨がツバを飲むとバッボナターレが微笑んだ。

「コーヒーがお好きかい?」

「甘いの好き。」

「ほうほう、なるほど。ここのハニーミルクがオススメだから是非飲んでみると良い。

おや？　ケーキもご要望かな？」

「あっ。」

店の入り口に立て掛けられた今日のオススメの写真と文字に、花梨の後ろに立っているムーディーブルースがケーキのひとつを指差していた。

「…チョコ。」

本日のオススメとして載っていたケーキのひとつがチョコレートを使った物があった。ムーディーブルースはそれを指差していた。

「これは少し苦みがあるよ？　だいじょうぶかな？」

「甘くて苦いのだいじょうぶ。」

「よし！　では、入店しよう！」

「声が大きいです。」

「うむ、失礼した。」

バッボナターレの大声に周りの視線が集まるため花梨が軽く窘めたのでバッボナターレはコホンッと小さく咳払いしたのだった。

それから花梨はハニーミルクがたっぷりの甘い温かいコーヒーとちょっとビターだが強烈に甘いチョコレートケーキをご馳走になった。

コーヒーとケーキを味わった時、表情の変化が乏しい花梨だが雰囲気で言うと背景

に愛らしく温かなイラストの花が散らばっているような状態だったのをバッボナターレはすぐに見抜いていて、微笑ましそうに花梨を見ながら自身もハニーミルクコーヒーを味わった。